



どんぐり

No.67



藍染め（明石市立大久保小学校）

兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITSU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

Nature Education Center

自然にふれる



兵庫県立南但馬自然学校

副校長 村上 慶 光

自然学校で活動する子どもたちの元気な声が聞こえなくなり、今年も南但馬自然学校に冬が訪れました。今年9月以降の厳しい残暑もなく、この原稿を書いている12月中旬でも比較のおだやかな日が続いています。そのせいか、竹田城跡を囲む雲海も今年は長く楽しむことができます。

本校は、今年度も県下の公立小学校55グループ76校の自然学校をお迎えすることができました。自校の特色をいかし子どもたちが生き生きと活動できるプログラムを考えられ実行された各学校の先生方のご努力に敬意を表すと共に、今年度の自然学校の受け入れが無事に終了しましたことに対して、職員一同心から感謝を申し上げます。自然学校での5日間の体験を糧として、子どもたちが今後の学校生活を積極的かつ有意義に送ってくれることを願っています。

さて、昭和62年に本県で開催された「こころ豊かな人づくり懇話会」

で示された「人は自然とのふれあいの中で自然の神秘、優しさ、恐ろしさなどに感動し、豊かな感性、問題解決能力、粘り強さなどを培うとともに、人とのふれあいを通して、生きる喜びや苦しみを知り、思いやり、協調性、社会性などを身に付ける」という提言を受け、昭和63年から本県の自然学校推進事業が始まりました。以後様々な自然体験プログラムが開発され、また、各学校でも先生方が苦労されながら試行錯誤を繰り返され、時を重ねるにつれて各学校には多くの経験が蓄積されて現在に至っています。しかしながら、自然学校が学校の教育活動として定着していくにつれ、一方で、様々な課題も生じています。

私の小さい頃は、住んでいるところが田舎ということもあり、学校が終わってからテレビでアニメの放送が始まる夕方までの間は、子どもたちの遊び場は木々で覆われた裏山であり、豊かな水をたたえ多くの魚が泳ぐ川や池であり、稲刈り後のわら

が積まれた田んぼでした。石ころであれ、木の切れ端であれ、そこにある物は一つとして同じものがないけれど、工夫次第でいくらでも遊べるもので溢れていました。もちろん、遊び方を間違えれば危険なこともありましたが、多少の擦り傷等をこしらえながらも、みんなで考えながら遊んだものでした。今から思えば、このような遊びの中で、身を守る力、判断力や創意工夫をする力等が自然と育まれていたのかも知れません。

現代に目を転じてみますと、都会に住む子どもたちはもちろんのこと、自然に溢れた地域に住んでいる子どもたちでさえ、自然の中で遊ぶという機会がほとんどないのが現状であり、人にとって大切な「自然とのふれあい」の時間は大きく減少しています。このような中では、「時間をかけてゆっくり自然にふれる」というシンプルな自然体験がより一層必要なのかもしれません。しっかりと組み上げられた従来のプログラムに加え、例えば、「自分で太めの木の枝を切り、形を整え穴を空けてコマをつくる。そのコマがよく回るように重心の位置を変えたりおもりをつけたりと試行錯誤を繰り返し、最後は全員参加のコマ回し大会を実施する」などの取組はいかがでしょうか。じっくり時間をかけて考えながら工夫することで科学的思考力の育成も期待できると思います。



おかげさまで、本校は、昨年度開校20周年を迎えました。これを契機とし、今後、本校での自然学校の在り方等について検討を進めていくこととしています。本校をご利用いただいた先生方のアンケート等をもとにして自然学校の現状と課題を把握・分析し、南但馬自然学校将来構想検討委員会での議論を通して、5年後、10年後の本校の在り方について将来ビジョンとして取りまとめたいと考えています。あわせて、本校で実施します体験プログラムについても、より「原体験」を重視したものを加えながらリニューアルしていく予定です。今後、様々な機会を通して皆さまにお知らせしていきますので、ご理解ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

自然学校の充実に向けて



兵庫県立南但馬自然学校

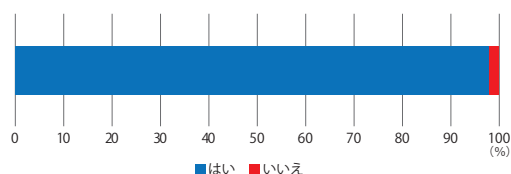
主任指導主事兼指導課長

御 栗 康 嗣

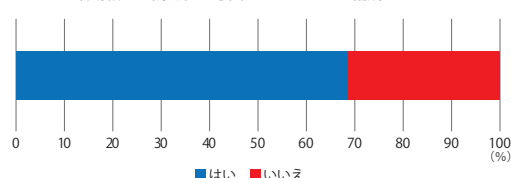
昭和63年から県下の公立小学校の5年生を対象として始まった自然学校推進事業もまもなく実施30年を迎えようとしています。兵庫県立南但馬自然学校は、昨年度開校20周年記念リレーイベントを展開しながら、開校20周年記念シンポジウムを開催しました。これを契機とし、本校が、本県自然学校推進事業の中核施設として、今後の自然学校の在り方等、子どもたちの「生きる力」を育むための目指すべき方向性を検討する準備に取りかかっています。この一環として、平成27年度・28年度の本校利用及び利用予定小学校の協力を得て、「自然学校の現状と課題についてのアンケート」を実施しました。（有効回答数…教員699名）ここでは、特徴的な項目について紹介します。

◆自然学校プログラムについて

学校では経験できない体験活動や感動体験活動が組み込まれている



活動相互の関連性を意図したプログラム編成である



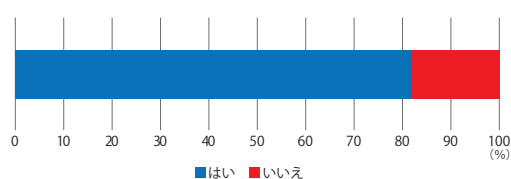
「学校では経験できない体験活動や感動体験活動が組み込まれている」という質問項目で、「はい」との回答は、100%近くありました。雲海の風景に出会えるかもしれない早朝朝来山登山や闇夜での真の静けさを体験するナイトハイクなどで自然の神秘性に気づかせたり、火おこし器でおこした火を用いた野外炊事で便利になった日常生活を振り返らせたりする活動など、様々な活動がプログラムの中に組み込まれています。その反面、「活動相互の関連性を意図したプログラム編成である」という質問項目で、「はい」との回答は、70%弱にとどまっています。前問から分かるように、学校教育の内容や環境では得難い

活動を自然学校で子どもたちに体験させたいという先生方の思いが伝わってきます。しかし、平成21年度より自然学校実施日数が5泊6日から4泊5日以上と弾力的になり、限られた日数の中でその思いを反映させてプログラム編成していくと一つの活動の関連性が薄れてしまう場合があるという課題が見えてきました。これまで蓄積してきた活動を一度見直し、整理することも必要なのかもしれません。例えば本校では、竹を伐採し、竹箸や竹飯ごうを作り、それを利用して野外炊事を行うという繋がりのあるプログラムを紹介しています。詳しくは、平成25・26年度研究紀要をご覧ください。

◆指導者（教員・指導補助員）に関することについて

「指導補助員の資質能力の差が大きい」という質問項目で、「はい」との回答は、80%を超えています。10年以上も指導補助員としての経験がある人もあれば、初めて指導補助員として自然学校に関わる人もあります。経験の差がこの数値となって表れてきているのだと思います。自然学校の現場では、初めての指導補助員でも、先生方の指導のもと、先生方を助け、子どもたちの活動の指導補助や引率補助をします。自然学校の効果的な実施を図るために、各学校での事前打合せに十分な時間をかけておられるでしょうが、経験が少ない指導補助員には、本校で実施して

指導補助員の資質能力の差が大きい



も参考にしていただき、自然学校が「本物に出会う感動体験」や、「絆に気づき、感謝する体験」、「ふるさと意識の醸成を図る体験」等の場になることを期待しています。

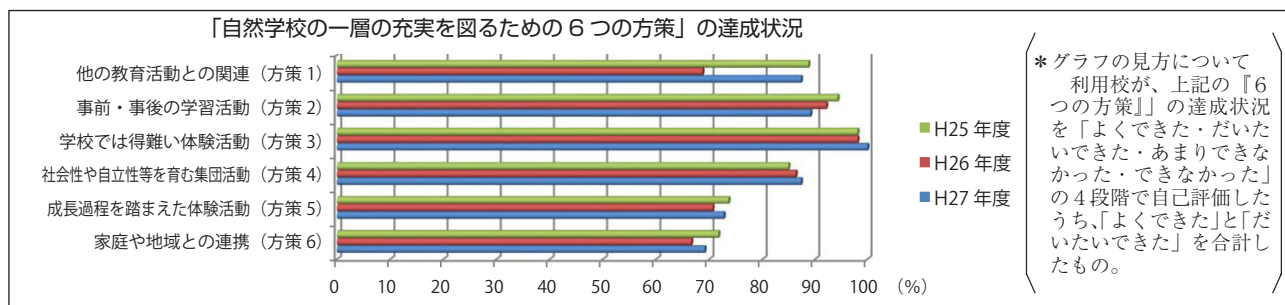
います指導者養成講座の受講を是非すすめていただきたいと思います。

自然学校推進事業は、現行の学習指導要領で求められている発達段階に応じた自然体験活動の推進を具現化したものと言えます。各学校においてもこれまでの取組が財産となり、充実した自然学校が実施されています。このような中であって、本校では、見直すべき部分や課題となる部分を明らかにしながら、自然学校の更なる充実を求めて、「自然学校プログラム」の在り方と更なる充実「人材育成と研修の在り方」「里山整備の在り方」等を柱とする「南但馬自然学校将来ビジョン」の策定を進めていきます。これからの自然学校を考えるうえでこのビジョンも参考にして

子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実のために

～ヒントとなる野外炊事の取り組み方～

本年度、55 グループ（76 校）の利用校から提出のあった自然学校実施報告書より、平成 20 年 3 月に自然学校評価検討委員会から提言された「自然学校の一層の充実を図るための『6 つの方策』」の達成状況は、下記のとおりとなりました。



ここ 3 年間の傾向を見ると、方策 1～4 については、ほぼ 80% を超えており、概ね達成したという結果が出ています。特に方策 3 については今年度 100% となっており、「学校では得難い、南但馬自然学校だからこそできる体験活動を子どもたちにさせたい」という先生方の思いが反映された結果となっています。

その一方で、方策 5～6 については、ここ 3 年間、70% 前後という結果が続いています。方策 6 の取り組み方については、一例として、本誌 No.66 の「特色ある取組 手紙タイム」でもふれましたので、今回は、方策 5「子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実」について、述べてみます。

今年度は、方策 5 について、次のような特色ある取組の報告がありました。

- ・ チャレンジクッキング（班別オリジナルメニュー）
- ・ 野外炊事でのオリジナル食材の買い出し（前々日のヒメハナ公園ハイキングで実施する）
- ・ 児童全員で構成した実行委員会（企画・しおり・キャンプファイヤー・レクリエーション）での活動計画
- ・ 複数回の野外炊事（1 度目の反省を生かし、2 度目以降の体験で自身や仲間の成長を実感する）

「成長過程を踏まえた」という意味の確認になりますが、小学校高学年児童の成長過程としては、

- ・ 物事をある程度対象化して認識することが可能になってくる。
 - ・ 自分がやりたいと考えて、選択し、繰り返しそれについて思いをめぐらし、その活動を展開する中で、活動が深まり、達成感が得られる。
- （「生きる力を育む自然学校」（平成 20 年 3 月）から一部抜粋）

ことなどが挙げられます。そして、上記の活動はそのことを十分踏まえたものとなっています。その中でも「チャレンジクッキング（班別オリジナルメニュー）」という活動に取り組んだ利用校がありましたので、その工夫された 4 例の取り組み方について、紹介します。

- 1 事前学習として、家庭科等において、班ごとに野外炊事で作るメニューを考えさせ、必要な食材とその分量、調理方法を計画して、利用施設へ食材を注文し、実施する。
（メニュー例：野菜炒め、卵とじ丼、ポトフ、ホイル焼き、ウズラのベーコン巻き、キムチうどん炒め）
- 2 利用施設の野外炊事メニューの食材に、1～2 品程度別の食材を加えることで、新しいメニューを作る。
（メニュー例：カレー＋うどん→カレーうどん、やきそば、米＋ベーコン→そば飯）
- 3 すべての班が「カレーづくり」をする。ただし、さらにカレーをよりおいしくする食材を、金額を同額にするという条件の下で、班ごとに相談させ、その食材をカレー材料とともに注文し、実施する。
（追加食材例：チーズとリンゴ、チョコレートとコーンとコーヒーの粉、卵とコーンとマヨネーズ）
その後、カレーコンテストを開き、どのカレーがおいしかったかをコメント付きで投票し、表彰する。
- 4 利用施設の野外炊事の複数のメニュー（本校の場合は、カレー、肉じゃが、シチュー、やきそば〔いずれも、同じ単価〕）から、班で相談、選択させて、実施する。



班で、出来上がった食事の味を分かち合うだけでなく、班の間でも、互いに食事を分け合って味を楽しむことで、班同士の交流を深めたり、評価しあったりすることも非常に有効であると考えます。

また、上記の 4 例は、今年度、児童数約 60～220 名の中・大規模校で、実際に行われた取組です。「1」のように、全くゼロから児童に計画させることから、「4」のように、利用施設の既成の野外炊事メニューから選ばせることまで、児童実態に合わせて幅広く対応できる内容です。ただし、この 4 例いずれについても、児童が当日に主体的に取り組めるよう、指導者が事前のメニューの内容、手順、安全面で注意すること等、児童の事前学習を充実させる手立てが大切になってきます。

方策 5 の視点で、貴校の次年度の野外炊事において、その児童実態と成長過程に応じ、「自分がやりたいメニューを考えて、選び、取り組む」という活動を検討されてはいかがでしょうか。
（文責 山根 伸治）

南但馬自然学校調査・研究委員会から

本校では、平成 27・28 年度の 2 年間にわたり、「日常生活において体験頻度の低い原体験（火体験、木体験）を組み込んだ自然学校プログラムの有効性の検証」をテーマに、研究を進めています。今年度は、11～12 月にかけて 2 グループ 5 校を対象に、特に自然学校における火体験の有効性についての検証を行っています。以下、研究途上ではありますが、その検証結果の一部について報告します。

（調査目的） 自然学校プログラムに、火体験アクティビティを意図的に組み込むことで、その有効性について検証する。

（調査時期） 11 月中旬～12 月上旬

（調査対象） 2 グループ 5 校の児童（143 名）、教員（25 名）、指導補助員（10 名）

（調査対象校の実施した火体験アクティビティ）

野外炊事、火おこし体験、キャンプファイヤー

（調査方法） 児童に対して「火に対する感じ方シート」を使って、火に対するイメージについて、自然学校 1 日目入校式前と 5 日目退校式前に調査し、その変容について調べる。

* シートの構成及び記入の仕方

火のイメージを「安全なー危険な」「こわくないーこわい」など 15 項目、7 点満点で表記してある。4 点（どちらでもない）を中間点とし、数値が低くなるほどプラスイメージ、数値が高くなるほどマイナスイメージになるよう構成している。児童は、火に対して抱いているイメージに対して、直感的に合う数に丸を付けて回答した。（例：全然こわくない 1 点 ～ とてもこわい 7 点）

火に対する感じ方シート

（質問） あなたは、おどろきの生活で火を使ったりする「火」に対してどのよう
な感じを抱きますか。あてはまるところに丸をつけてください。
※あまり時間がかかりすぎないように速く記入してください。氏名（ ） 小学校 5 年 組 第 1 学年

（例）

安全な	1	2	3	4	5	6	7	危険な
安全な	（「火」に対して「とても安全な」と感じたら）							危険な
安全な	（「火」に対して「すこし危険な」と感じたら）							危険な
	（「火」に対して「どちらでもない」と感じたら）							

とたいもへん まあま すこし どちらでもない すこし まあま とたいもへん

1	安全な	1	2	3	4	5	6	7	きけん
2	明るい								暗い
3	使いたい								使いたくない
4	好き								きらい
5	やさしい								きびしい
6	さわがしい								おとなしい
7	大きい								小さい
8	きれい								きたない
9	生きている								死んでいる
10	動いている								止まっている
11	強い								弱い
12	いいにおい								いやなおい
13	あつ								あつくない
14	楽しい								つまらない
15	こわくない								こわい

火に対する感じ方シート

それ以外にも児童には「火体験ふり返しシート」でのふり返しを、教員、指導補助員には「火体験アクティビティ評価シート」等で評価や火体験に対する考え等について回答してもらいました。

「火に対する感じ方シート」の調査した結果が下表のとおりです。

表 火に対する感じ方の変容について

項 目	（点）	1 日目	5 日目	増 減
楽しいーつまらない		3.52	2.41	-1.11
好きーきらい		3.99	2.89	-1.10
こわくないーこわい		4.33	3.32	-1.01
使いたいー使いたくない		3.82	2.82	-1.00
安全なーきけん		5.24	4.26	-0.98
きれいーきたない		2.99	2.19	-0.80
やさしいーきびしい		4.54	3.80	-0.74
明るいー暗い		2.16	1.52	-0.64
大きいー小さい		2.60	2.04	-0.56
生きているー死んでいる		3.02	2.51	-0.51
動いているー止まっている		2.22	1.77	-0.45
いいにおいーいやなおい		4.55	4.12	-0.43
強いー弱い		2.13	1.86	-0.27
さわがしいーおとなしい		3.20	3.24	0.04
あついーあつくない		1.61	1.68	0.07
一人あたりの平均点		3.33	2.70	-0.63

表の結果から、15 項目中 13 項目について、数値が下がっており、児童の火に対する感じ方について、概ねプラスイメージに変容したことが分かります。特に、「きらい→好き」「つまらない→楽しい」「こわい→こわくない」「使いたくない→使いたい」「きけん→安全な」の 5 項目において、概ね 1 点程度下がっています。

また、児童は火体験後に以下のようなことを述べています。

- ・自分たちが気をつけると、照らしてくれるなど火にはいいことがいっぱいあると思った。
- ・安全に気をつければ、こわくないと思った。
- ・あったかくて、安心する。
- ・いい使い方をすれば、冬には暖かくて、人にはうれしいもの。

（「火体験ふり返しシート」から一部抜粋）

今回の調査時期が、11～12 月の寒い時期であったこともあり、なおさら火の暖かさをプラスイメージとして体感できた児童も多かったようです。しかし、それ以上に変容の大きかった理由として、関わった指導者（教員、指導補助員）の意識の高さによるものが大きかったと思われます。具体的には、指導者は、以下のようなことに留意して指導を行っていました。

- ・火は便利だが、危ないことも伝えた。
- ・炎が上がっている時には、無理に手を出さないようにした。
- ・キャンプファイヤーの時、飛ぶ火の粉や火に近づきすぎないように注意した。

（「火体験アクティビティ評価シート」から一部抜粋）

実際、活動中の指導者の言葉かけにおいて、たとえば、野外炊事の際も「軍手をしないで、薪を火に入れないように」「鍋が熱くなったら、取っ手などを持たないように。大変なこと（火傷）になるから」、キャンプファイヤーの際も「火のまわりに近づき過ぎないように」「トーチ棒は立てないで、斜めに持つように」という内容からも、火の安全な扱い方について、指導の徹底を図っていることが伺えます。

このように、自然学校における指導者の火に対する安全指導も奏功し、児童は、火に対してのプラスイメージを持つことができたと考えられます。また、関わった教員の火体験に対する思いや考えについて、紹介したいと思います。

- ・子どもの生活体験から、火を使う機会が減っているのだから、自然学校では体験させたい。
- ・火体験は、自然学校の活動に必須である。自然学校以外では体験しにくくなっている。
- ・火は人間生活の基本となるもの。自然学校の時くらいは体験させてやりたい。

（「火体験に関するアンケート」から一部抜粋）

今回の調査において、日常生活で児童が火を扱う機会が少ない今だからこそ、指導者の多くが、児童に対して人間の生活の根源であった火を直接体験する場が必要であり、その有効な場こそが自然学校であると感じていることが分かりました。

以上のことから、指導者が火の負の部分も把握し、安全面も十分配慮した上で、自然学校において児童に火体験を味わわせることは、児童が火に対してプラスイメージを高めるとともに、危機管理の適切なスキルを身に付けるきっかけとして有効であると言えるのではないのでしょうか。

（文責 山根 伸治）

特色ある取組

社会性や自立性等を育むために

～ Challenge ウォーク（小野市立河合小学校の取組）～

1 はじめに

自然学校評価検証委員会報告「生きる力を育む自然学校」（平成 20 年 3 月）では、自然学校の一層の充実を図るための「6つの方策」の一つとして、「社会性や自立性等を育むための集団活動等の充実」が示されています。ここでは、その具体的な取組として、小野市立河合小学校が平成 27 年 10 月に行った「Challenge ウォーク」を紹介します。

2 取組

小野市立河合小学校（児童数：55 名、活動班 8 班）は、「自ら 考え、行動し、学びとる！」をテーマとし、何事も自分たちで考えてチャレンジし、団結して集団での力を高めることを目的の一つとして自然学校を実施しました。その目的を達成するために行われた「Challenge ウォーク」は、竹田地区や梁瀬・与布土地区を徒歩と路線バスを利用して、1 日をかけて班ごとに散策する活動です。これに併せて、2 回行う野外炊事のうち、2 回目は、オリジナルメニューで行うため、その食材の買い出しも兼ねて行われました。

担任は、「主体的に計画し実行する力を育てたい」「長い距離を歩き切ることで達成感を味わわせたい」「地域の人や文化に触れることで地域のよさを感じさせたい」という願いから「Challenge ウォーク」を設定されました。また、実施にあたり、活動範囲内でポイントを設定して、児童が移動するポイント間の距離をすべて計測したり、行き先の下見や連絡を十分に取ったりするなど、事前の準備を入念に行われました。そして、この準備のもとに児童が計画を立てる際に戸惑わないようにと「ポイントをと落とし込んだ地図」「ポイント間の距離表」「モデルコース」等の資料を作成されました。

事前学習では、班での話し合い活動を中心に行われました。児童は前述の作成資料や「必ず行く」「一か所以上に行く」「行っても良い」に分類されたポイントなどから、どこを選択するかを班で話し合っってコースを決定し、時間や移動方法、距離、活動内容などの計画を考えました。この事前学習により、児童一人一人が活動のイメージやねらいを明らかにすることができたのではないかと思います。また、班での話し合い活動を通じて、仲間との意思統一を図るとともに仲間意識の醸成につながったことと思います。

1 日の細かい行動を考えてみよう

時刻	いる場所や移動方法 (徒歩、バス)	使う時間 移動距離	活動内容
8:30	南但馬自然学校		出発！(徒歩)
9:00	茶すり山古墳	3.4 km	遊ぶ
10:00	茶すり山古墳	30 分徒歩 1.5 km	徒歩
11:00	ヒメハナ公園	60 分徒歩 1.5 km	昼食・遊ぶ
12:00	第 11:30 点検(11:30) こめやストア-2 第 12:45 点検(12:45)	15 分徒歩 0.7 km	野外炊事 buy 2 の買い出し
13:00		バス 13:45 15:00	
14:00	よふど温泉 第 12:10 点検(12:30) 第 4:30 南但馬自然学校	60 分徒歩 1.5 km	温泉でやりくり(14:30)
15:00		バス 15:45 16:00	
16:00			

およそ歩く距離 (12.7) km

バスの利用 (有) 無 (1 日)

計画書（一部抜粋）

「Challenge ウォーク」で決定されたコース（一部抜粋）



「Challenge ウォーク」前日に、「明日、『Challenge ウォーク』やね」「わたし、めっちゃ楽しみ」と話をしている児童がいました。2 人の表情を見ていると、自分たちで計画を練り上げてきたものを実行に移すワクワクした気持ちと上手にいくかなというドキドキとした気持ちが伝わってきました。児童が主体的に計画したことで、意欲的、積極的な取組になった表れではないでしょうか。小野市立河合小学校の自然学校実施報告書には、「事前から主体的に取り組む姿が見られ、班の中で意見の対立を経て、話し合いから折り合いをつけて班として決定をすることができており、社会性の面からも成長が感じられた。また、歩く距離が長い班では 14 km もあり、どの班も 10 km 前後を歩ききり、達成感を味わっていた」とありました。

児童の感想（一部抜粋）

- ・はじめは、10 km も歩けないと思ったけれど、みんなと一緒だと、思ったより楽に歩ききることができました。歩くのが楽しかったです。
- ・バスを待っていると 90 歳のおじさんが柚子をくれました。いい匂いでした。
- ・ヒメハナ公園まで歩いて行く途中、とてもしんどい時に、友達に「あと少しだからがんばろう」と声をかけられました。すると、やる気が出てきて、疲れがスーッと消えました。



3 まとめ

活動を通して成就感や達成感を得ることは、自立心を育むことにつながります。また、社会性等の育成を図るためには、話し合い活動や協力し合える場面など、人間関係を深める活動を重視するとともに、トラブルなどを時間をかけてじっくりと自分たちで解決する時間的なゆとりや児童の活動を支える指導者の見守り体制が大切です。次年度の自然学校の計画にあたり、集団生活を充実させる活動内容や活動目的に応じた活動形態の工夫について検討されてみてはいかがでしょうか。

(文責 井上 貴至)

自然学校における健康管理について (平成27年度南但馬自然学校傷病発生状況から見てくこと)

平成27年度の本校での自然学校利用校は、55グループ76校です。自然学校傷病発生状況のまとめを通して、児童が健康で安全に活動するためにはどんなことに注意すればよいかを考えてみたいと思います。

1 傷病記録より

(1) 傷病発生状況及び医療機関受診状況 (表1参照)

今年度の傷病発生率は、平成26年度と比較して、内科、外科ともに減少しています。また、過去21年間の平均傷病発生率と比べても減少の傾向にあります。

医療機関への受診率については、今年度、内科は大きく増加し外科は大きく減少していますが、過去21年間の平均受診発生率と比べると、内科及び外科ともに減少しています。

表1 傷病発生状況及び医療機関受診状況

	傷 病			受 診		
	内科	外科	合計	内科	外科	合計
H27年度発生件数(件)	173	155	328	25	18	43
H27年度発生率(%)	0.73	0.66	1.39	0.11	0.08	0.18
H26年度発生率(%)	0.95	0.84	1.79	0.06	0.14	0.20
21年間の平均発生率(%)	0.87	0.80	1.67	0.13	0.10	0.24

※発生率は、件数を利用児童延べ人数で割り、算出した。
※小数第二位までで四捨五入しているため、合計と合致していない項目がある。

(2) 傷病発生状況の内訳 (図1.2参照)

内科の内訳では、多い順から「発熱・感冒」が23.0%「頭痛」15.0%「腹痛」14.5%でした。「発熱・感冒」では、「疲れによる発熱」との診断が3件ありました。

外科の内訳では、多い順から「打撲」29.1%「切創・刺創」18.7%「捻挫・突き指」15.5%の順でした。骨折は2件でした。

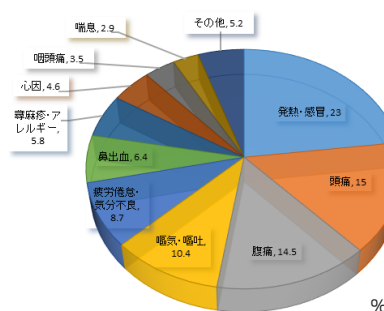


図1 内科の内訳

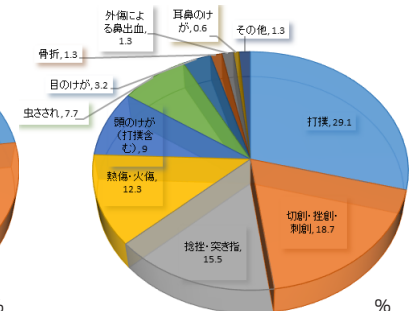


図2 外科の内訳

(3) 活動別けがの発生状況 (図3参照)

活動別のけがの発生状況では、「自由時間」におけるけがが一番多くありました。医療機関を受診した18件中7件が「自由時間」に発生しています。また、今年度2件の骨折がありましたが、2件とも「自由時間」に発生していました。

(4) 日別傷病・受診発生状況 (表2参照)

内科の傷病発生件数は2日目が多く、次いで3日目となっています。受診では、1日目と4日目が多かったです。例年に比べ、今年度は1日目から医療機関を受診する児童が多く、その中には、入校前から体調を崩しているにも関わらずそのまま参加している児童もいました。

外科の傷病発生件数は2～4日目

が多く、受診では3、4日目が多かったです。自然学校2日目以降は様々な活動が入っており、けがが発生しやすい状況にあります。

表2 日別傷病・受診発生状況

日目/内訳(件)	内 科	外 科	合 計
1日目	28(7)	10(2)	38(9)
2日目	52(5)	47(1)	99(6)
3日目	46(4)	44(8)	90(12)
4日目	44(8)	46(6)	90(14)
5日目	3(1)	8(1)	11(2)
合 計	173(25)	155(18)	328(43)

※()内の数字はそのうちの受診件数を示す。

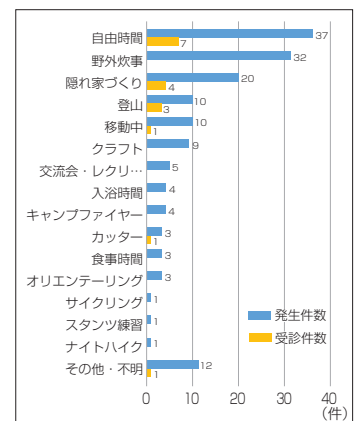


図3 活動別けがの発生件数・受診件数

2 健康で安全な自然学校に向けて

4泊5日の自然学校を有意義な活動にするためには、事前の健康管理が大切です。ほとんどの学校では、自然学校の前日が休日になります。医療機関が休みというところも多くあり、前日に体調を崩していても、受診をためらい「このくらいなら・・・」「自然学校が終わってから受診しよう」とそのまま参加している児童も見受けられます。最初から参加したい気持ちもよくわかりますが、体調を崩している場合には、無理をせず、受診を済ませてから参加されることをお勧めします。途中で悪化してしまえば、満足のいく活動ができなくなってしまうからです。無理をしない、無理をさせない勇気も必要ではないでしょうか。

また、けがの多い「自由時間」は指導者の目が行き届きにくく、児童の緊張も緩みがちになるため事前指導や指導者の配置等を工夫することが大切です。特に、自然学校後半になると、疲れがたまったり、施設にも慣れ、緊張感が緩んだりすることが考えられるため、児童の疲労度に合わせたプログラム編成やこれまでの自然学校を振り返る生活指導や安全指導を適宜行う必要があると考えます。

今年度の傷病発生状況のまとめを通して見えてきた課題を、今後の児童の健康管理や安全指導に活用していただければ幸いです。

(文責 南 陽子)

平成 28 年度 講座・研修会のご案内

自然学校指導者スキルアップ研修

新企画

※これまで実施していた自然体験活動 1 日講座に替わる新たな研修です

目的：様々な自然体験活動に係る技術や指導法、プログラムデザイン等について研修し、指導力の向上を目指します。
対象：県下の公立小学校教員

(第 2 回は初任者研修及び
10 年経験者研修として
も受講可)

募集定員：各回 30 人程度

回	期 日	内 容
第 1 回	平成 28 年 4 月 14 日(木) 9:30～12:00	アクティビティの基礎基本 ・実習「クラブ」「自然散策」「1 人用テント設営」(3つのうち2つを選択)
第 2 回	平成 29 年 3 月 2 日(木) 9:30～16:15	プログラムデザイン作成の基礎基本 ・実習「竹食器づくりと竹筒飯ごうによるご飯炊き」・演習「自然学校プログラムデザイン」の作成(各校の自然学校プログラムを持ち寄り、情報交換を行い、よりよいプログラム作成を行う)

自然学校出前講座

目的：本校の職員が要請に応じて県下各学校等を訪問し、自然学校の事前学習等の支援を行います。

実施期間：平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月(実施日は各学校の要請をもとに調整します)

内 容：○自然学校に関すること

・自然学校の趣旨説明・事前相談・事前学習・保護者説明会(原則、本校を初めて利用する学校のみとします)

※出前授業として、兵庫県立南但馬自然学校で展開されるアクティビティの一部も行うことができます。
(ロープワーク実習、火おこし体験、1 人用テント設営、野外炊事実習等)

○プログラムデザインに関すること

申込方法：実施 1 か月前までに「自然学校出前講座申請書」で申し込んでください。(※事前に本校との調整をお願いします)

自然学校講座(指導者入門)

目的：自然学校の趣旨や指導者の役割を理解するとともに、野外体験活動等の実習を通して、指導者としての資質向上を高めます。

期 日：平成 28 年 8 月 23 日(火)～25 日(木) ※1 日又は講座単位の受講も可

場 所：兵庫県立南但馬自然学校

対 象：大学生、一般県民、県下の公立学校教員(高等学校初任者研修及び高等学校 10 年経験者研修として受講可)、その他自然学校に関心のある者

募集定員：30 人程度

内 容：自然のお話・自然散策、ロープワークを生かした遊具づくり体験、野外炊事指導の基礎基本、指導補助員の心得等、自然学校・野外活動におけるリスクマネジメント、キャンプファイヤーの基礎基本

参 加 費：約 7,000 円(宿泊料、食事代、リネン料、保険料、活動材料費)



ふし自然学校・アフター自然学校

目的：創意工夫を生かした体験活動の展開を支援し、自然学校の事前・事後活動の充実を図ります。

期 日：日帰り又は 1 泊 2 日

(1) 自然学校受入期間中 金曜日・土曜日受け入れ可(金曜日から土曜日にかけての 1 泊 2 日も可)

(2) 自然学校受入期間以外 全日(日曜日～土曜日)受け入れ可 ただし、春季、夏季、冬季の長期休業期間中を除く

対 象：県下公立小・中学校

内 容：自然散策、朝来山登山、自然体感ゲーム、自然物クラフト、野外炊事、隠れ家づくり、星空観察、テント泊等

費：食事代(弁当持参可)、施設使用料、活動材料費が必要です。

※詳しくは、兵庫県立南但馬自然学校指導課までお問合せください。

親子で自然学校 ～親子で南但馬自然学校を楽しもう～

期 日：第 1 回 平成 28 年 4 月 30 日(土)～5 月 1 日(日) 第 4 回 平成 29 年 1 月 28 日(土)～1 月 29 日(日)
第 2 回 平成 28 年 8 月 27 日(土)～8 月 28 日(日) 第 5 回 平成 29 年 3 月 11 日(土)～3 月 12 日(日)
第 3 回 平成 28 年 12 月 17 日(土)～12 月 18 日(日)

場 所：兵庫県立南但馬自然学校

参 加 費：約 3,000 円程度(宿泊料、食事代、リネン料、保険料、活動材料費)

対 象：原則として県内の小学生とその保護者

※原則 1 泊 2 日ですが、日帰り希望も受け付けます。

募集定員：10 組(40 人程度)

内 容：山菜さがし、ピザづくり、キャンプファイヤー、自然物クラフト、餅つき会、星空観察、キャンドルづくり、手打ちうどんづくり、きのこ菌の植え付け、遊び場づくり 等

申 込 み：事前に参加申込が必要です。各回の実施日 10 日前までにお送りください。
(第 1 回については 5 日前まで)



遊友体験活動 ～感動！発見！を南但馬自然学校で～

期 日：第 1 回 平成 28 年 4 月 30 日(土) 9:30～「新緑の里山を楽しもう！～森の山菜さがし～」
第 2 回 平成 28 年 7 月 9 日(土) 9:30～「初夏の里山を楽しもう！～水辺の生き物さがし～」
第 3 回 平成 28 年 10 月 22 日(土) 9:30～「紅葉の里山を楽しもう！～さつまいも掘りとどんぐりひろい～」

場 所：兵庫県立南但馬自然学校

参 加 費：各回 50 円(保険料)

対 象：一般県民(小学生以下は保護者同伴でご参加ください)

募集定員：第 1 回：各回 10 組 40 人程度 第 2・3 回：20 組 80 人程度

申 込 み：事前に参加申込が必要です。各回実施日の 5 日前までにお送りください。

※詳しくは、
兵庫県立南但馬自然学校 指導課
(079-676-4731) まで
お問合せください